高木佳蔵著「客家(はっか)－中国の内なる異邦人」を読む

－歴史を生き抜くとは何かを考える－

１．四つの客家精神

万金油、タイガーバームガーデンで有名な胡文虎(こぶんこ)が、『香港崇正会総会三十周年記念特集』という雑誌の序文に、「客家の特色」として、次のような言葉を寄せている。胡文虎は福建系の客家人である。

「客家人を見るに、次の四点が特色としてあげられます。

第一は、刻苦耐労(こっくたいろう)の精神ということであります。われわれ客家人の祖先たちは、乱を逃れて南遷し、苦悩に耐え、貧困を恥じず、強健な身体と刻苦の精神で生き抜いてきました。これなくしてわれわれの先人は生きながらえられなかったのであります。そしてこの精神が美風として受け継がれ、男女貧富を問わず、勤労を尊ぶという精神を持ち続けてきたのであります。

第二は剛健弘毅(ごうけんこうき)の精神ということです。先人たちは故郷を遠く離れ、先住民の間に雑居し、また山間の貧地にいて、時には外敵の攻撃を受けることがありました。このため自らを守る必要が生れ、尚武の気分も生じてきました。そして処生には謙虚であり、義を守ることに勇敢であるという気風も生まれたのです。男は剛毅沈着(ごうきちんちゃく)の風に富み、女は纏足(てんそく)を拒否して、健身の風を守りました。

第三は創業勤勉の精神です。わが客家の人びとは、故地離れ、他郷にあっても勤労善恩、創業精神に富んでいました。女は農作業や家内仕事に精を出し、男に内顧の憂をいだかせませんでした。そのため男は安心して遠地へ赴けたのです。数百年前から客家の男たちは万里の波濤(はとう)を越えて南洋に赴き、開墾の大業に取り組み、今日客属発展の基礎をつくったのであります。

第四は団結奮闘の精神です。わが先人たちは、世事に多難であったから、身体をきたえ、気力を充実させました。独立の容易でなきことを知り、団結して困難を克服してきました。家処に安居し、あるいは異境にあろうとも、わが客属の人びとは必ずや助け合い、一致団結して外侮や外圧に対抗してきました。この精神はやがて広がり、わが中華民族の発展に大きく寄与してきたのであります。」

この刻苦耐労、剛健弘毅、創業勤勉、団結奮闘の四つの精神は、客家のおかれてきた過酷な環境から、必然的に生まれてきたのだといえる。　P.101

２．一族で教育を支える

『嘉応州志』は、次のように伝えている。

「辛亥革命後、同州(広東省梅県)一帯では、学校教育に非常に力が入れられてきた。抗日戦争中という不安定な時期をみても、･県一県で小学校が六百四十ヵ所、生徒数は六万人に達した。

中学・高校・師範学校・職業学校も三十数校に及び、卒業生は年間千人を超えている。大学もかつては嘉応大学だけだったが、現在は南華学院もある。国内各地の大学へ進学するものも多く、また海外へ行くものも少なくなかった。」

この･県は、広東省東北部の山間地であり、客家の「父祖の地」として有名である。が、ここはまた、共産中国発足までは、全国で学校のもっとも多い県としても有名であった。そのほとんどが私立であった。これは･県出身の客家人が金を送ってきて学校を建てたからである。近接する客家人地域の興寧・五華・平遠・蕉嶺の各県も、やはりとび抜けて学校の多い県であった。

その他、図書館、体育館、公民館などもかなり作られている。海外へ出ている客家人たちは皆、親元に金を送ってくる。この金は耕地を買ったり、家屋を建てたりして使われる。余った金は、商業の元手にされるようなことはほとんどなく、多くの場合、教育のための支出(学校・図書館の建設など)にまわされた。また、海外で成功した客家人にとっても、故郷で自分の名前を冠した学校をつくることは大きな喜びでもあり、夢でもあった。

一族を家族とみなして、子弟の教育を一族全体で支援する大家族制。その存在のおかげで客家人の子弟は、同じ貧農の子であっても、他の中国人の子供より教育を受けるチャンスが格段に多かったのである。

これは現在も続いていて、今なお海外にいる一族は、大陸の家族に送金をしてきている。教育や知識を全面的に否定した文化大革命の時期にあっても、その送金が絶えることはなかったという。また、大陸の一族子弟が海外へ留学する時に、台湾にいる同族が全面的に支援するということすら行われているのである。 P.118 ～ 119

3．客家の諺

客家には多くの諺(ことわざ)がある。その言葉のはしばしに、客家の生活がかいま見える。そのいくつかを紹介してみよう。

<食物>

(食べればふとる。歩けばやせる)

(タニシは食べてばかりいて、背中にコケができることを知らない)

<衣服>

(銭をたっぷり持っていれば、十里四方の人々は、自分をりっぱな人物と見てくれる。何も新しく、服を買わずとも良い)

(まず先に衣裳で品定めして、人柄はあとで見られる)

<住居>

(ひどいあばら屋から状元＝科挙のトップ合格者が出る)

(人の心は限りがない。冬は天井が低ければといい、夏は高ければという)

<処世>

(人は平等なら不平がない。水は平なら流れない)

(大人(だいじん)は話をするが、小人(しょうじん)は手を出す)

<金銭>

(ホラ吹く奴は金出さぬ)

(おしゃべりを減らせば、借金できぬ)

(金持ちは金が金を探してくる。貧乏人は人が金を探す)

(バクチで負けるのは、みなバクチで勝った時から始まる)

(他人は私に三月の春風のやさしさを求めるが、自分は他人に六月の雪＝ありもしないものを求める)

<病気>

(長患いは孝子を失う)

(病気を治すのには気が七割、薬が三割)

(心の病いは薬でも医者でも治せぬ)

(死ぬこと以外、大病などない)

<行状>

(本当に才あるものは謙虚だが、ニセ君子は自分で自分を誇る)

(謙虚な者は成功するが、うぬぼれ者は必ず失敗する)

(病は口より入り、禍は口から出る)

(ヒマな人間に悪事多し)

(人がいるところには人情があるもの)

(気分がよければ、イモ汁を食べてもうまく感じる)

(世の女は半分は優しく、半分は冷淡な心をもっているもの)　P.124 ～ 126

高木佳蔵著「客家(はっか)－中国の内なる異邦人－」講談社新書、講談社 1991 年 6 月 20 日刊

－ 2006 年 10 月 7 日記－